

『日本の資本主義—創造的敗北とその後』再読

本書は 1993 年にケンブリッジ大学出版から刊行された”JAPAN’S CAPITALISM”の邦訳であり、岩波書店から 1995 年に出版された。著者はレポートでも何回か取りあげてきた都留重人先生である。

本書副題の”創造的敗北とその後(creative defeat and beyond)”は、ケネス・ボールドィング教授の「敗北に対しては創造的な反作用が生ずることが極めて多い」という仮説に基づいている。そのうえで、”その後(and beyond)”をつけ加えたのは、高度成長期以後の日本で生じた事態は制度的な観点から見て極めて重要だと、著者が考えたことによる。

本書は 400 ページを超える大著であり、次の 8 章から構成されている。

1 「敗戦と占領軍当局による諸改革」 2 「復興への道」
3 「高度成長率の時期」 4 「高度成長期における政府の役割」 5 「転機到来」 6 「二重の『価格革命』」 7 法人資本主義の進展」 8 「日本はどこへ行くのか」

このところ戦後日本経済や政治社会にかんする文献を集中的に読んでいるが、本書からも多くのことを学ぶことができた。再読とはいえ、初めて読むような新鮮味があった。占領期から高度成長、1980 年代までの日本の資本主義の歩みについて体系的に書かれており、読み終わると多くの付箋がついていた。付箋をつけた箇所、とりわけ示唆を得たのは次の点である。

- ・日本の復興への道が、時を同じくして起こった国際情勢の展開によって地ならしされ、経済復興に役立つように米国の対日政策が急転換した。
- ・日本経済の急成長過程にとって、有効需要の源泉としての民間投資支出の演ずる役割が最大のものである。その独特の高成長のメカニズムを 7 点にまとめている。「GNP」という耳慣れた略語は、日本では、多分どの国においてよりも、Gross National Pollution の略だといえる。汚染対策そのものが、GNP を増加させる追加的な有効需要の創出に役立つ。
- ・オイル・ショックによる外部と都市部の土地の内部からの「二重の価格革命」が、日本経済と市民生活に大きな影響をおよぼした。
- ・資本主義が混合経済型の社会経済組織に向かって変容しつつあり、したがって社会主義との収斂の道をたどっている。福祉指向型所得再分配のための公共政策が混合経済の特徴である。



(2014 年 10 月 27 日)